

三〇 盗人御仕置之事

『御定書百ヶ条』

四十一 盗人御仕置之事

一人を殺致候者、引廻獄門、

一盗ニ入、刃物ニ而疵付候者、獄門、

但、忍入無之共可致盗与疵付候者、死罪、

一徒党致盗可致与人家江押込候頭取、獄門、

同類ハ死罪、

一人家江忍入土蔵杯破候類、雜物不依多少死罪、

一盗人之手引死罪、追剝獄門、追落死罪、

片輪者之取持之品盜取候者、死罪、

一手元之品風与盜取、金拾兩以上ハ死罪、雜物代金ニ

積り拾兩以上ハ死罪、

但、拾兩以下雜物共 入墨敲き、

(後略)

三一 少女かたりに付、手鎖・父追込

(文化十四年七月九日)

一町奉行達、

左之通申付候由、

川原町直三郎娘

里十三歳

先月廿八日八木町銅屋孫兵衛方ニおゐて女帶二筋

御家中名前を以かたり取、当五日之夜孫兵衛店江

投込有之由相聞候処、其方儀不審之儀有之ニ付及

吟味候処、其方仕業ニ相違有之趣及白状始末大胆

之至不届至極ニ候、依之急度申付方も有之候得共

以 御慈悲不及其沙汰、手鎖申付候事

川原町

直三郎

其方娘里ん儀右同断、畢竟其方常々申付方不行届

故之儀不都束之至候、依之追込申付候、急度相慎

可罷在候事

ノ

三三 髪結下女盗みに付、引廻しの上追払

(文政二年十二月十二日)

一 町奉行達、

博勞町髪結嘉兵衛下女  
養父郡八木村 千世

右之者裏町きのと申者方江平日心易立入候処、きの所持之品衣類并蒲団様之品五色程盜取候由、依之番人<sup>(總)</sup>遂詮儀候処無相違ニ付、番法ニ取斗候旨申達候由、右者拾丁引廻し之上追払候由、

三三 身持不宜小盜致し、引廻しの上追払

(文政四年十月二十七日)

一 御郡奉行達、

左之通一昨日於評席申渡候由、

本町

惣町引廻之上、追払、

法道寺屋

甚三郎

右常々身持不宜、其上所々にて小盜致し候趣、及白状、不届至極ニ付、

三四 盗みに付、溜入申付 (天保十年四月二十三日)

一 町奉行達、

七軒町  
油屋 次

右所持之品昨夜左之通致紛失候由、然ル処段々穿鑿為致候処、同町百姓清助、風呂屋林平と申者盜み取候由ニ而早速□□召捕り直ニ溜入ニ申付候由、盜物左之通、

長持 文庫骨柳 文庫一ツ 紺縞袴 浅黄肌着  
はかた帯 羅紗三徳 とひ色三徳 羅紗たはこ  
入 縮緬財布 札六拾匁

三五 盗みに付、但馬国徘徊差留 (天保十年五月十五日)

一 町奉行達、

不届之儀有之、追払申付置候処、

七軒町

清助

悔先非改心ニ付、親類、組合之者々相願、格別之以、御憐愍徘徊差救候処、猥ニ帰宅致し居、其上同町林平と申合、油屋清次宅江忍入品々

盗取候段、大胆之至不届ニ付、拾町引廻之上追払申付候、以後但馬国徘徊差留、

清助と申合、油屋清次宅互忍入  
品々盗取候段、大胆之至不届ニ  
付、拾町引廻之上追払申付、以後但馬国同断、  
七軒町 林平

三六 かたりに付、追払

一町奉行達、

左之通於評席申渡候由、

於町々かたり物致し不届之義有  
之ニ付及吟味候処、及白状始末  
大胆之至候、依之十町引廻之上追払申付候、  
田結庄町 疊屋伊作 三十歳

(文政十年十一月二十一日)

一町奉行達、

其方儀先達而御領分於美含郡村々御家中之名前を以、銀札致借用候段大胆之儀、全不恐 上を  
取計重々不届之至ニ候、依之追払申付候、以後  
但馬、丹後、美作之国々於致徘徊者急度可申付事

(天保六年七月十二日)

三七 徘徊差留め中立帰り、入墨百敵の上追払

(文政十一年二月十五日)

一御郡奉行達、

左之通評席ニ於て当十三日申渡候由、

入墨并百敵、御城下、元居村引  
廻し之上追払、丹後国、美作国  
徘徊差留、  
無宿 伊作 三十三歳

右者文化十四年九月御領分徘徊差留置候処、其後立帰り於所々致盜候段及白状候始末、重々不届ニ付右之通申付候事

三八 不届之儀有之、過料 (文政十一年正月二十二日)

一町奉行達、

左之通申渡候由、  
不届之義有之、吟味之上申付方  
も有之候得共、格別之勘弁を以  
不及其沙汰、過料五貫文申付候事  
魚屋町 鋸屋幸七

三九 入牢人病氣に付、出牢願 (文政二年十二月二十五日)

一 御郡奉行達、

福成寺

土淵村重藏儀、長々入牢仕罷在候処、暑寒とも罷居候故歟、寒前々少々病氣之様子ニ御座候処、極寒ニ相成候而る日々病氣も弥増此節ニ至候而者、

格別難渋之趣ニ相聞申候、依之深重之御慈悲を以、拙寺方迄御下ケ被為成下候者、養生為致度奉存候、右願之通御聞濟被為成下候ハ、重藏者勿論、家内之もの共親類等に至迄、難有仕合奉存上候、右之段幾重ニも御赦免之程奉希上候段、一札差出候由、無余儀事ニ付、福成寺迄出牢、日数三十日程同寺江御預ケ之旨可申談、伺之通申談候処、則申渡候由、

三〇 銀札文字入替に付、入牢 (文政二年十二月二十五日)

御郡奉行

一 町奉行 達、

通用銀札文字入替候付、

良雪と馴合、銀札文字入替取扱候付、

山之中久畑村  
良雪

(勘 助

魚屋町  
表具屋

利兵衛

右之面々、今日評席ニ於て詮儀中、先入牢申付候由、

三一 依願療養ノ為、福成寺預ケ許可

(文政二年十二月二十五日)

一 御郡奉行達、

病氣ニ付福成寺方依願、為養生

来正月末迄御預ケ被 仰付旨、  
申渡候由、

氣多郡

土淵村入牢人

重藏

三二 農繁に付、日数不相立候得共追込赦免

(天保十一年四月二十四日)

一 町奉行達、

左之通昨日於評席申渡候由、

農業時節ニ付、日数不相立候得共、追込赦免、

新町

新助

三三 家中の名を以如何數儀有之、戸締

(文化十四年十月十九日)

一 町奉行達、

昨日於評席左之趣申付候由、

在方ニおゐて齋藤岩尾名前を以如何數儀有之、遂吟味申付方も有之候へとも、其向々憐愍之儀申出候付、勘弁を以不及其沙汰、戸申付候事

材木町

山家屋

忠右衛門

三四 不行跡の老兄養育の為、引取方許可願

(文化十二年八月十八日)

一 町奉行達、

一

河原町

米地屋宗助

右兄伝六儀不行跡ニ付、天明四年御帳外奉願候処、

其後追々行跡相改、寛政三年亥年徘徊相願、願通相濟米里村江住居仕候処、老年ニ而養育之もの無之難渋ニ付、引取養育仕度旨相願候由、故障無之候者願通申付候様申談、

三五 帳外の老父帰住赦免願 (文化十二年八月二十五日)

一 町奉行達、

小御料庄町  
龜藏組合之者

右龜藏父伊兵衛と申もの、先年何之故障もなく如何様之義敷出奔仕候付、御帳外ニ奉願、然ル処此度不快之旨申越候付、早速罷越養生為致候へとも手紙之場所其上身薄之義、難渋仕候付、帰住之義相願候由、故障も無之候へ、願通申付候様申談、

三六 組合預ケ中出奔組合々嘆願ニ付、徒罪

(嘉永三年十月十五日)

一 町奉行達、

裏町

一 左之通申付候由、

鍋屋太右衛門  
七かれ才 治

先達而不実会合致し組合預ケ中致出奔候処、以後急度心底相改候趣ニ而、組合并親類共々御慈悲之儀度々願出候得共、其以前再度も手当申付候と相不用、右体及不埒之義ニ付、容易ニ難差赦候処、父太右衛門老衰之上此節足病相煩ひ別而難涉致し候段、親子之儀忘難致而

嘆願仕呉候様申儀ニ付、弥改心可仕一日ノ看病為致度組合共々嘆書御慈悲

之出候ニ付、格別之以御憐愍、帰住御赦免付候、并数度不実会合いたし組合預ケ中致出奔候段、不届之至ニ候、依之徒罪申付候由、

但、十一月五日赦免、

三七 病気快方に付、帰牢申付 (嘉永三年十月十九日)

一

牢舎人

出町 重藏

右弘化四末年十一月九日病氣ニ付、三ヶ寺本高寺より嘆願之筋も有之、并重キ御法事も有之ニ付、格別之以御慈悲、且那寺正眼寺へ病中差下ケ、療養為致候処、此節追々快方之趣ニ付、帰牢申付候様、町奉行申談、

三六 徒罪中働方宜組合嘆願に付、赦免

(弘化三年七月十二日)

一 町奉行達、

徒罪番人預ケ之処、徒罪中格別働方宜、組合之者共嘆願申出候付、旁以御慈悲、赦免、

右同断、

戸申付置候処、右同断、親類申出候付、以御慈悲、赦免、

八木町 樽屋金次

同因幡屋 勘五郎 勘右衛門

魚屋町 紙屋彦三郎

三九 火災に格別相働き徒罪赦免 (慶応二年二月七日)

一町奉行達、

昨四日火災之節、  
格別相働候段、尤  
之事候、依之未タ  
日数不相立候得共、  
格別之以 御慈悲、  
徒罪赦免申付候、  
此末心得違之儀無  
之様、急度相嗜可  
中事

三四 帳外者改心に付、帰住赦免 (嘉永二年十一月七日)

一町奉行達、

昨年御帳外相成候得共、其後京  
都ニ而相働、追々改心仕候ニ付、  
以 御慈悲、帰住 御赦免被成下候様、願書差出候ニ  
魚屋町 梶屋治助

裏町 安原屋小市郎  
袴座屋 次助  
鑄物師町 釜屋 米蔵  
出町 如来寺抱  
骨柳屋 安蔵  
八木町 直見屋喜三郎  
但馬屋 徳次  
魚屋町 桶屋 七助  
中屋 定吉  
池田屋 伊平  
金物屋 平吉  
河原町 村田屋 慶蔵

付、故障も無之候ハ、勝手ニ申談候様申談、

三六 徒党ケ間敷取計に付、叱り

(文化十五年四月二十一日)

一町奉行達、

左之通町小頭を以申渡候由、

去ル十一日之夜及深更新町  
与兵衛方へ懸合筋ニ而罷越  
し彼是申募り如何敷義共相  
聞、懸合筋も有之候ハ、如  
何様ニも穩便ニ取斗方可有  
之処、大勢申合徒党ケ間敷  
取斗、御城下をも不憚重々  
不屈ニ付、申付方も有之候  
得共、不及其沙汰、以後心  
得違ひ無之様叱り、

但、喜助儀者御郡奉行方申渡候由、

田結庄町  
米屋与三右衛門弟  
与 作  
名主嘉十郎下男 嘉 六  
甚兵衛  
新左衛門  
同茂兵衛下男 七  
下郷福見村 喜助

三三 盗みニ付、引廻し之上追払 (文化十五年四月晦日)

一町奉行達、

左之趣於評席申渡候由、

不審之義相聞候付、召捕逐吟味候処、  
當十八日夜魚屋町魚屋伊七宅江忍  
入、衣類等品々盜取候趣及白状、先  
達而も故障之儀ニ付、番人共々追払候処、立掃右之始  
末重々大胆不屈ニ付、申付方も有之候へとも不及其沙  
汰 御城下引廻し之上追払、

無宿 婦 美

(追記)

六月廿日 手鎖赦免 魚屋町 弥三兵衛  
六月廿八日 首鎖赦免 河原町 (久平 次作)  
七月六日 入牢赦免 川原町 徳兵衛

三三 帳外者改心組合嘆願に依り帰住赦免

(文化十三年二月二十七日)

三四 材木取計不審之儀有之入牢、手鎖

(文政元年六月七日)

一町奉行達、

博勞町平田屋 市兵衛後家

組合之者

左之通於評席申付候由、

材木取計不審之儀相聞候付、  
及吟味候処、去秋御山江入込松木  
伐出し、并日野辺下ヶ谷ニ而材木  
仕出被 仰付候節、不屈之儀有之、  
其上吟味之節折を以度々申陳候付入牢、  
去秋御山江入込、松木伐取候付首鎖、  
先年日野辺下ヶ谷ニ而材木仕出被  
仰付候節、不屈之義有之ニ付手鎖、

川原町 徳兵衛

同町 久 作平  
魚屋町 弥三兵衛

右組合平田屋市兵衛後家悻嘉兵衛と申もの、先年為  
持京都江罷越候処、於先方身持不宜不都束之義相聞、  
元來身薄ニ付、後難之程も難計帳外相願候処、其後  
身持相改渡世相勵、組合近所之もの江も先非を相嘆、  
老母江も貢等仕、当時ニ而者奇特<sup>(之)</sup>取計仕候段見聞  
候付、猶又先方居所等相糺候処、弥心底相改罷在候  
ニ相違無之、然ル処老母儀去年來病氣罷在、嘉兵衛



弟も老人有之候得共、病身ニ而老母看病渡世も仕兼

難波仕、老母儀も近比ニ而者嘉兵衛厚志奇特之趣相

悦候而帰往之義度々相願候処、此末甚<sup>(嘉ノ誤カ)</sup>兵衛身持之処

ハ組合之者共急度請合候間、帰往之義相願候由、猶

又詮<sup>(遊)</sup>義之上故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

8 出石犯科帳

三望 兄殺害の亀藏一件 (文政三年)

○亀藏酒狂の上、兄殺害

一 御物頭山田二郎八達、

組 銀右衛門

右弟亀藏与申者、兄銀右衛門与酒狂之上、少々及

口論、銀右衛門を及殺害、直様逃去候段申達、尤

相組之<sup>(者脱カ)</sup>とも直ニ亀藏尋ニ罷出候由、

一 右検使罷越候処、左之通疵有之、

首 三寸 突疵

肩 五寸

肩下四寸

同所横疵老尺

(以上七月二十日)

○亀藏発見、落命寸前

一 御物頭山田二郎八達、

組 銀右衛門弟 亀藏

右昨夜々所々手配致し相尋候処相知不申処、銀右

衛門近辺之粟畑ニ倒居候を見付、及吟味候処、脇

差ハ鞆ニ納メ有之候へとも、咽少々疵有之、倒れ

居候、たゞ少々息も致し候得共、追々可及落名様<sup>(命)</sup>

子之趣申達、

一 亀藏儀万一及落命候ハ、死骸塩詰ニ致し、及差図候

迄親類江預候様二郎八江申談、且銀右衛門死骸ひそ

かに取置致し同様、伺之通申談、

一 亀藏疵口左之通、

切口 咽一ヶ所

横 三寸

深サ壹寸計

(以上七月二十一日)

○亀藏死骸御仕置場に晒

銀右衛門弟  
亀藏

右当廿日夕兄銀右衛門を及殺害、翌朝ニ至り自滅致し候ニ付、亀藏死骸御仕置場ニ捨札致し、二日晒之上取捨ニ申渡候様、御郡奉行・町奉行江申談、

一右ニ付未明ニ付、御仕置場江取出し夫々捨札等致し候之様、其節左之通小役之儀申談、

御郡奉行江

(御郡組小頭  
御郡組)

町奉行江

(町小頭  
町同心)

御目付江

下目付

右亀藏死骸取出させ、御仕置場江跡方見へ隠れに

罷越、様子見届候様申談、

一捨札案文之儀兩奉行ニ而取調申達候様申談、

但、認之儀者町方ニ而賃書ニ為致候由、

案文左之通、

亀藏  
当辰廿五歳

此もの儀当七月廿日夕、兄銀右衛門を切殺し逃去候処、翌朝ニ至り居宅脇畑中ニ於て自滅致し候、在命ニ候得者重キ御仕置可申付処、死後之儀ニ付、死骸取捨申付者也、

辰七月

(以上七月二十七日)

○死骸晒後、水上村惣三昧に捨埋

一御郡奉行

町奉行 達、

取捨亀藏死骸晒相濟候付、今般水上村下惣三昧江埋候付、小役之者見届候処、相違無之旨申達候由、

(以上七月二十九日)

○晒の死臭水上村に迄達す

『東門日乘』

廿八日（前略）去ル廿一日兄ヲ殺し自滅いたし候山椒

畑龜藏、今晝右者手礮木へ取捨ニ相成、罪状を立札

ニいたしさらしものニ相成、□多番いたし候由、見

物ノもの多く、其臭水上村迄達スと云、嗚呼痛哉、

此者傷人之大倫後人可懲十里ニ

（以上七月二十八日）

三六 河野瀨兵衛処刑（天保六年六月七日）

一 瀨兵衛

右今朝申渡前ニ牢屋にて食事并酒、餅菓子等 例之

通被成下候由、尤食事常之通給、酒式合斗給候由、（食べ以下同）

餅ハ常ニ不好由、給不申候由、

一 右相仕廻（廻）昨日申談候通、警固役清水半三郎昨日之書

付之趣読渡し候処速ニ御申請達、直御仕置場へ連行、

途中警固之面々左之通、

（中略）

一 五ツ時過礮場ニおいて討首無滞相濟、至而都合能刀

取、縄取迄も手際能見事ニ討候由、御郡奉行始前書

出役之御役人共装束相改、昼時前御用番宅へ罷越委

細申達、

但、死骸、首一所ニ藁包ニ而水上村惣三味へ取捨埋候

由、小役之もの共申達候段頭々申達候、

三七 河野瀨兵衛辞世の歌

『東門日乗』

七日 雨、五時晴、四時又降、今日河野瀨兵衛打首被

仰付候由、昨日方用意有之、今朝六半時申渡有之、直

ニ松縄手御仕置場にて斬首致候由、御郡奉行・町奉

行・普請奉行・御目付立会有之、五半時頃無滞相濟候

由、御郡組須貝良吉殊外手際よく首打落候由、

極楽も地獄も捨て

虚空なる

雲井に残り 君を

守らん

右瀨兵衛辞世のよし、土壇に直り高声にて申候よし、

尤牢屋にて御酒被下、余程醉居候由、言舌しかと分り

かね、まず右様ニ聞え候よし、（後略）

三西、仲間彈九郎処刑一件（嘉永三年）

○彈九郎盜みに依り召捕

一評席一座御役人達、

今日彈九郎評席へ呼出及尋問候処、左之通白状致し候由、手続書差出左之通、

彈九郎召捕候迄之手続書

（前略）同村小□と申者呼寄敵敷及尋候処、山之中畑村東覚寺へ暫時□<sup>（座之）</sup>込居可申趣及白状候付、直ニ御郡組初次・藤藏、町同心彦次・治太夫<sup>（懸）</sup>義為召捕差遣、十九日晝六ツ比参着、畑村庄屋善右衛門江得斗申含、東覚寺へ入込為下墨、四人之者夫々手配致し寺廻り囲ミ居候而、本堂を駈出候処ヲ初次召捕り一当り取当り、脇差ヲ取捨投倒し捻上ケ縄懸ケ外三人之者一同取集無滞召捕罷帰候旨申達、入牢為致置候事

戊五月十九日

○彈九郎量刑ニ付、遠山左衛門尉へ伺書

（以上五月十九日）

（江戸便）

鍛冶屋村 彈九郎

右之もの左之通 <sup>（江戸・南町）</sup>町御奉行遠山左衛門尉様江御伺書御差出、御同所ニ而御付札ニ而御伺濟申来、

仙石讚岐守家来

在所中間 彈九郎 <sup>戊式拾四歳</sup>

右之者常々疑敷儀も有之候ニ付、召捕及吟味候処去申十二月以来城内主人住居向締有之、大切成場所江度々締こぢ明忍入、并城外役所向締こぢ明忍入、金子、銀札等盗取、其後又候傍輩共之土蔵壁を切、忍入、品物盗取質入致、右金子、銀札等者夫々遣払残金者少々所持致罷在候段、及白状候ニ付、於在所入牢申付置候、右之者如何程之仕置申付候而相当可然哉、口書写相添此段奉伺候、以上

六月廿二日

仙石讚岐守家来

辻 嘉兵衛

一 引廻之節小頭以下警固、天明年中長右衛門御仕置  
之節之通ニ而可然奉存候、

御付札

書面之もの引廻之上死罪程ニ申付可然候、

(以上八月十一日)

○彈九郎罪状申渡書

一 左之通御用部屋ニ於て申談、

御郡奉行  
町奉行

明後五日牢舎彈九郎、成敗場ニ於て死罪被

仰付候、先格之通無手拔取調、相伺可申候、

一 左之通両奉行を相伺候付、伺之通夫々申談、

一 明後五日六時揃之事

一 彈九郎

右牢舎口江引出、下目付立合御郡小頭申渡書読渡

畢而、本繩懸ケ直ニもっこニ乗セ、拾町并居村引

廻し仕置場江連行候事

○彈九郎引廻し之上処刑

一 左之通申談候旨、昨日御郡奉行申達、

繩取

御郡組 喜作

(以上十二月三日)

(仙石郡九) 山之中

弘原 (鍛冶屋村之)

元中間

彈九郎 戊戌拾四歳

其方儀、去申十二月以来城内締有之大切成

場所江度々締こぼ明忍入、并城外役所向締

こぼ明忍入、金子、銀札等盜取、其後又候

傍輩共之土藏壁を切忍入品物盜取質入致、

右金子、銀札者夫々遣弘候旨及白状、大胆

之始末重々不届至極ニ付、引廻し之上死罪

申付もの也、

戌十二月

助縄

初次

扣縄

宗平

畚

太刀取

加助

助太刀

善右衛門

右弾九郎御仕置之節役割、

一 御郡奉行達、

牢舎 弾九郎

右一昨日伺済之通、御郡小頭を以御仕置之旨今曉

申渡候処、速ニ及請候由、夫方仕給被成下候処、

御酒四合斗り、飯式杯、好ニ付蕎麦五(杯カ食ベ)給候上畚

ニ乗セ□多荷ひ拾町引廻し御仕置場囲ニ連行、又

御酒式杯給ひ、飯五ツ給候上ニ而死罪、太刀取も

至而手際よく相仕廻(舞)、直ニ水上惣三味江取捨相済

候由、

(以上十二月五日)

○弾九郎打首、観者如堵牆

『東門日乗』

五日雪霏々、寒入、今曉七ツ七歩也、此日苗信来、添

以美果三式片可珍賞也、今朝正六時罪人(舞)団九郎引廻

之上打首被仰付、松縄手ニ於テ也、観者如堵牆、

○弾九郎辞世の歌『但馬志料 三十五』

宗鏡寺藏

嘉永三年十二月五日、盜弾九郎松縄手ニテ打首、尤

十丁引廻之上、

七重八重かすみの月を ふみこへて

くもらぬ後世に 行(く)そうれしき(脱)

三九 新撰組の来藩 (慶応二年)

○新撰組脱走隊士探索依頼

一町奉行太田忠兵衛達、

新撰組

内海次郎

松本喜次郎

三井丑之助

（近藤芳助

人相書

元新撰組

柴田彦三郎

当時橋府臣

変名 海野七五三

右之者、船屋半左衛門方江止宿致し候、尤福知山  
辺より其筋探索として罷越、昨夜此表江着致し候、  
先触も左之通之由、

先触

一宿駕籠

四挺

右者急キ 御用ニ付、福知山方出石迄罷越候間、

無相違立可給者也、

松平肥後守預

六月十五日

新撰組

福知山宿方  
出石迄

宿々問屋中

右之もの当地御役人之内ニ面会致し度段申出、右  
ニ付、先つ一応京田戸一右衛門差出及応対候処、  
此度用向ハ左之人物、先般組之内致脱走、右為尋  
罷越候間、近辺若御心当り之所者無之哉、人相書  
書も差出急々御詮鑿被下候段申候由、

糸  
一右之次第ニ付兩奉行江申談、夫々江詮鑿之儀宿  
々江申談、

（以上六月十六日）

○柴田彦三郎召捕

一去ル十六日京都表方新撰組之内四人参り、同組脱走  
之者詮鑿之儀頼込候付、直様所々江探索筋之申談候

処、今日宵田村ニ而召捕、新撰組江引渡候旨申達候  
由、御郡奉行左之別紙を以申達、

氣多郡江原村  
骨柳屋  
宇兵衛

右同人方江海野七五三昨夜止宿仕、今朝前之川江  
顔洗ニ罷出候処、庭ニ而番人善平立捕ニ而召捕、

直様番人初平右之手差押、御郡組長太夫背打留、

三人ニ而無滞召取(腰力)口繩を掛、新撰組引渡駕籠連婦

候趣申達、

(以上六月十九日)

○脱走新撰組元隊士召捕の御郡組下目付昇進

一御用人達、

右之通御郡奉行申渡候由、

常々出精相勤、捕方等心懸宜、

昨日召捕者取斗之始末行届、尤

之事ニ付、小頭格、勤方は迄之通、

(以上六月二十日)

下目付格  
御郡組  
長太夫

三〇 孝人・奇特人に御褒美 (文政六年八月十日)

一御郡奉行達、

一左之通、於評席申付候由、

御米老俵

(常々心得筋宜)  
右同断、親九左衛門在命中并此節母及老衰自由も

不相叶処、昼夜心配致し介抱致し、前々両親とも

近所へ罷出候節ハ付添、事々深切(親以下同)ニ致介抱、彼是

厚相事、其上(任以下同)家内陸敷相暮候段尤ニ付、

右同断(之通為御褒美被成下候事)

鳥目老貫文

田結庄町油屋大吉母さつ

右同断、若年の比夫定吉致死去、大吉義至(儀以下同)而幼少

ニ罷在渡世難洪之処、昼夜心勞致し大吉を守り立

家名致相続、家居及大破候を新家作致、身持等も



宜敷、母子睦敷相暮奇特之至ニ付、右之通被成下候事

御米老俵

本町

柴屋 新兵衛

右同断、常々心得筋宜家業致出情、日々他所<sup>(惣)</sup>持等致し母ニ事方宜、先年妻長病ニ而相果候節態々看病致し遣、家内睦敷相暮候段奇特之義ニ付、右之通被成下候事

鳥目老貫文

宵田町魚屋源四郎女房きし

右同断、常々心得筋宜夫源四郎近年病氣罷在、家業働かね及難波候処、昼夜心を配り能々致介抱、手透<sup>(惣)</sup>之節ハ商売方ニ罷出相稼、家内睦敷相暮候段婦人之身分別而奇特之至ニ付、右之通被成下候事

御米老俵

材木町

糺屋 与市郎

右同断、常々心得筋宜第一兩親江厚相事候趣相聞、親与三八義近年病身ニ而職分働か多候処、心懸宜昼夜家業出情致し、職分相仕廻<sup>(惣)</sup>候上者兩親うちひねり等迄心を尽し、深切ニ相事候故兩親共も致安

堵候段、養子之身分ニ而奇特ニ付、右之通被成下候事

三三 孝人・奇特人推薦基準

(文化十二年正月十五日)

町奉行江、

町々其一町ニおゐて孝人、寄特人并家事格別出情致し候ものと、名主、行事とも見請ケ候随一のもの共老人宛、名前内々書出候様申付、書出候ハ、右名前之内、何町誰と申もの一町之内ニ而随一之ものニ候哉、此処<sup>(惣)</sup>連々厚く相糺し、十町之内ニ而老人可被申達候事

正月

三三 孝人、組合々推薦

(文政元年八月二十一日)

一町奉行達、

川原町  
大江屋与三右衛門  
六拾歳  
後家

一

二拾歳 せかれ 喜作  
十五歳 娘 その

右娘その平生母江事(奇)寄特者之由、組合惣代并庄屋奥印を以申達候由、

河原町

六十歳 与右衛門  
九十歳 母親

右与右衛門(儀)義、年来日雇持(稼)ニ而渡世仕来候、早日母江事(任)へ宜追々極老ニ及び、立居等不自由罷成候处、朝暮食事等ニ心を尽し彼是神妙奇特ニ養育仕候旨、組合惣代方申達候由、

三五 十歳の孝子熊蔵に御米壹俵 (文政三年二月七日)

一町奉行達、

当五日於評席左之通申渡候由、

拾ヶ年以前養子ニ参り其後妹老 魚屋町  
人出生、四ヶ年以前母致病死候 小野屋勇次郎俵  
由、然ル処父勇次郎頭痛持病ニ 熊蔵  
十歳

而折々否起り難義(儀)致し候処、昼夜を不厭、うち、ひねり致し、食事等深切ニ取斗、其中ニも幼年の妹能々介抱致し、常々陸敷相暮候趣相聞、幼年之義別而奇特ニ付、為御褒美御米壹俵被成下候事

三西 心得筋宜農業出精に付、鳥目壹貫文

(天保四年正月二十一日)

一御郡奉行達、

心得筋宜農業格別出精ニ付、御褒 出石町分百姓  
美鳥目壹貫文被成下、 鑄物師町 善六

常々心得筋宜家内陸敷、同断ニ付、同断  
御褒美右同断、 本町 喜作

三五 家業出精に付、御褒美 (文化十五年二月五日)

一町奉行達、

左之通於評席申渡候由、

博勞町  
中嶋屋半兵衛俵  
喜三郎

其方儀、幼年より実体ニ家業無油断昼夜致出情、(稱以下同)商売方入念取斗、其上兩親江事方宜、兄弟

多之処陸敷相暮、追々致繁米候趣、先年茂弟才助病氣之節開敷家業之中、(種)深切ニ致介抱遣候よし、且身持等常々相慎、万端質素を相守候段相

聞寄特之至尤之事候、依之為御褒美鳥目責貫五(愈以下同)百文被成下候、此上尚又厚相心懸ケ可致出情事

八木町

骨柳屋

又次郎

其方儀家業致出情、其上兩親ニ事方宜ニ付、先年御褒美被成下候処、其後尚更家業致出情兩親江事方宜、家内多之処陸敷相暮、常々質素ニ身分相守候段相聞、寄特之至尤之事ニ候、依之為御褒美乍輕少御酒代銀壱兩被成下候、此上尚更相励ミ可致出情候事

魚屋町

森尾屋

武兵衛

其方儀、常々心懸宜家業出情候付、先年御褒美被成下候処、其後も尚更無油断早朝より夜分迄も家業致出情、諸事志宜趣相聞、寄特之至尤之事候、依之為御褒美乍輕少御酒代銀壱兩被成下候、此上尚更相励可致出情候事

青田町  
桶屋

弥助

其方儀、志厚家業致出情候付、先年御褒美被成下候処、其後も尚更家業致出情、子とも育方も宜一同相持、家内多之処万端陸敷致渡世候段相聞、寄特之至尤之事候、依之為御褒美乍輕少ながら銀壱兩被成下候、此上尚更相励ミ可致出情候事

三三 義倉かた懸実体に相勤め、御米五俵

(文政八年八月二十九日)

一町奉行達、

左之通申渡候由、

常々家業致実体ニ召使等ニ茂擽  
 深く、并義倉かた懸り申付置候  
 処、是又実体相勤、依之、御米五俵ツ、年々被成下候事  
 右同断、家族睦敷、身分質素ニ  
 相守り、并義倉かた懸右同様ニ付、  
 御米五俵ツ、年々被成下候事

魚屋町 門垣屋又兵衛  
 同町 榎屋孫三郎

三五七 三夫婦相揃い御祝儀、年々御米壹俵式斗

(安政四年五月朔日)

一町奉行左之通申渡候由申達、

セかれ儀七孫順助夫婦共三夫婦  
 相揃、家内睦敷老母江(親)深切ニ相  
 事(仕)へ候、家業出精致し候段日出  
 度奇特之事ニ候、依之為御祝御  
 褒美、年々御米壹俵式斗ツ、被成下候由、

田結庄町 日野辺屋 庄 七

三五六 家業・農業出精に付、鳥目壹貫文

(天保十三年正月晦日)

一町奉行達、

家業出精ニ付、為御褒美鳥目壹(貫)以下同

文被成下、  
 農業出精いたし、近年祖母不快氣  
 ニ付看病致し、母親江安堵為致、  
 依之御褒美鳥目壹(貫)文被成下、

田結庄町紺屋 八十兵衛  
 出町 忠 七

三五九 商売値上無く実体に付、御褒美御米壹俵

(文政八年十月朔日)

一町奉行達、

左之通於評席申付候由、  
 其方義常々心得筋宜家業致出情(禮)  
 尤之事ニ候、近来諸売物直段引  
 上之処其之義無之、前々之通実  
 体ニ致商売奇特之至、依之、為御褒美御米壹俵被成下  
 候由、

八木町 鎌田屋 市右衛門  
 田結庄町 八百屋六太夫

三六〇 牢医出精に付、帶刀御免、又玄

(弘化二年七月二十七日)

一町奉行達、

左之通申付候由、

数年牢医出精

相勤候付、帯刀 御免、

本町  
町医

又 玄

三三 医業出精に付、帯刀御免、玄専

(天保十一年三月十五日)

三一 医業出精に付、帯刀御免、秋桂

(弘化三年五月二十五日)

一町奉行達、

年来医業出精致し尤ニ付、  
帯刀 御免申付候由、

町医

中野玄専

一町奉行達、

左之通当廿二日申渡候由、

常々医業心懸宜、且含之儀  
有之、依之帯刀 御免、

川原町  
町医

秋 桂

三四 行事实体に相勤、御酒代銀貳両、治右衛門

(天保七年六月七日)

一町奉行達、

一昨日於評席左之通申渡候由、

代々行事相勤、年来実体ニ相勤  
候ニ付、御酒代銀貳両被成下候  
事

新町行事

治右衛門

三二 医業出精に付、重ねて賞賜、秋桂

(弘化四年八月七日)

一町奉行達、

左之通当六日申渡候由、

常々医業出精ニ付、年頭  
御帰城 御目見被  
仰付、御心付式百疋被成下旨、

川原町  
町医

工藤秋桂

三五 行事出精相勤、御酒料銀貳両、由兵衛

(弘化四年八月二十九日)

一町奉行達、

左之通申渡候由、

行事役出精相勤候付、  
御酒料銀式兩被成下旨、

川原町  
行事

由兵衛

三六 町方地子手早く遂勘定、南鑲彦片

(天保十一年十二月十八日)

一町奉行達、

其方共儀町方地子向上納筋之儀、  
兼々申談候趣相心得、惣体申談  
も宜、当年之義ハ格別手早く遂  
御勘定候段尤之事ニ候、依之為  
御酒料南鑲一片宛被成下候、

名主

三郎太夫  
小左衛門  
傘力  
左衛門  
又十郎  
庄屋  
市右衛門  
又三郎  
忠右衛門  
喜兵衛

三七 拾い物届出報償規定の達 (天保十二年三月晦日)

一町奉行達、

左之通町方江申渡候由、

町方江

惣而拾ひ物之儀ハ早速奉行所江可訴出、落主出  
ニ於てハ金銀拾ひ候者江半金可被下候、衣類者  
其外巾着、脇差、紙入様之ものハ落主出ニ於て  
ハ不残返させ、相応之礼金可申付候、若し落主  
於不出ニハ残す可被下候、尤拾ひ候而可及難儀  
品々たりとも、早速訴出候得者拾ひ候者江難儀  
ハ不申付候、惣而内々ニ致し置、脇方相頭れ候  
ハハ於者品物取上ケ急度可申付候事  
(三)

三八 財布拾い早速届出に付、御酒料式拾足

(弘化元年十二月朔日)

一町奉行達、

先月廿六日夜於道中、財布取ひ  
候、早速奉行所江差出、正路之  
取斗尤之事候、依之御酒料式拾足被成下、  
本町 嶋屋八兵衛

三六 財布拾い、落主夕半金謝礼

(天保十四年十一月十六日)

一 町奉行達、

財布

銀札十四匁入

山之中奥山村

小助

右之者財布を落し候処、鋳物師町鍋屋長兵衛せかれ年十二才、此者拾ひ候由申出、御大法之通半金ハ拾主へ相渡し可然旨申付、右落し主江相渡候様申談候由、

三七 火災の節出精の面々へ御褒美

(文政十二年十月五日)

一 去月廿六日夜火災之節、町在出情之面々、名前町奉行差出候付、左之通被成下旨御用人江申談、

銀式枚

七拾九人

南簾壹片

勇取長藏

弟子三人江

三二 出水の節格別相働き銀式兩 (天保十二年五月十二日)

一 町奉行達、

左之者共当九日出水之節、於大橋格別相働候付、銀式兩被成下候由、

博勞町

塩屋 惣右衛門

吹田屋

宮田屋

紺屋

中嶋屋

嘉三郎

丸屋

三平

藤太郎

藤屋 義助

魚屋 惣平

米屋 重三郎

中屋

十人

次郎兵衛

重三郎

次郎兵衛

三三 御侍中へ恐敬厚く御褒美銀壹兩

(弘化元年十二月晦日)

一 町奉行達、

家族、召仕迄御侍中江対し

恐敬厚趣ニ付、

門垣屋

又十郎

為御褒美銀壹兩被成下、但、召仕等江も銀壹兩被成下、

10 神社と祭礼

(以上九月八日)

一 四半時比 神輿御供揃候段注進達 御聴、御門前江  
御出被遊候事

但、御年寄共其外御役人御先達而罷越候事

三七三 御旅所夜中見廻りの事 (文化十二年九月朔日)

一 御徒士目付、御徒士之者御旅所并東御門御番所、夜  
中見廻り候事

一 東御門前々之通、夜中明置候事

一 練物 御覽相濟、神輿 御通前、御対面所江被為入  
候事

三七四 諸杉祭礼日程 (文化十二年)

一 寺社奉行達、

諸杉御祭礼之節罷出候山伏、神子名前并六町練物

書付差出、御側御用人を以差上ル、

(以上九月七日)

一 神輿御供揃候段御目付申達、御側御用人を以達 御

聴候上、御年寄共其外御役人共裏御門脇江罷出、神

輿通御之節平伏、御目付注進有之、御旅所江罷出、

一 御目付達、

替儀無之段申達候由、  
昨今御神事ニ付、警固役 御城下見廻り候処、相

神輿御供之御徒士目付、御徒士之者共、御本社江



被為 入、相替儀無之段申達候由、  
御規式無滞相济候付、御暇被成下旨、御側御用人を  
以被 仰出、  
(以上九月九日)

三五 諸杉社祭礼に若者取締に付、評席申付  
(文化十四年九月十四日)

一 昨日於評席、左之通申付候段、町奉行申達、

此間諸杉御祭礼之節、其方共町内若キも  
の心得違不都束之取斗共有之、畢竟申付  
不行届故之儀、申付方も有之候へ共、御  
祭礼之儀ニ付、此度は不及其沙汰、以後  
心得違無之様可申付事

右町々  
行事共  
其方共右同断之節、町役人申談相不用、  
右町々  
若キ者共  
右同断、

右同断之節、其町内若キもの取計宜、申  
付方宜、尤之事ニ候、此上猶又常々心得  
違無之様可申付事  
宵田町  
名主共

右同断、  
右同断、町役人申談相守、右同断、  
同 行事  
若キ者共

三六 祭礼の練物差縫れ宵田町名主・行事注意  
(文政二年九月二十七日)

一 町奉行達、  
左之通於評席申付候由、

宵田町  
名主  
茂兵衛  
行事  
右当九日御祭礼之節、裏町練物彼是差縫、神輿  
渡御及遅々、右体之義者前方如何様とも取治方  
可有之処、其儀無之段、取斗不行届故と不都束  
之事ニ候、以後厚心配取斗可申事

三七 御役人棧敷ニ而練り物見物 (文政二年九月九日)

一 神輿御供揃候段、御供之町奉行御目付方申達候旨、  
当番御目付申達、

一 左京始御年寄共、其外御役人御門前御棧敷江罷出、  
練り物追々繰出し相済、  
但、御棧敷前々之通南向、御たばこ盆詰番差出、

三七六 磯部社祭礼に御初穂 (文政二年九月十六日)

一 磯部江祭礼ニ付、御初尾銀式両 御書翰役 井上三郎左衛門

右 御代参相勤候旨申達、

三七九 九月在方祭礼日 (文政二年九月朔日)

一 御郡奉行達、

当月中在方祭礼左之通之由、

十一日 宮内村 一宮

十四日 弘原中村 伊福辺

三八〇 節分に付、諸杉社参詣前々の通

(文政二年十二月二十一日)

一 御目付達、

一 今晩節分ニ付、東西御門方諸杉江参詣人之儀、例  
年之通、大善院方申達候付、前々之通申談候由、

三八一 御城稻荷社由来

『出石藩士・竹村遊山伝聞・追加』

一 稻荷社建立ノ年月不詳、小出侯泉州岸和田ヨリ当城  
ニ移ラレ后、泉州田中村ニアリシ稻荷社ヲ当地ニ移、  
城内為鎮守尊敬シ玉フ、其后松平伊賀守忠周ノ城主  
タリシ時再造立、古社ハ光明院ニ玉フ、同寺境内ニ  
鎮座后焼亡、

三八二 御城稻荷社は城郭鎮守

『出石志料』

御城上稻荷境内ハ元小出侯築城之砌ハ、天守台之石垣  
之由、終ニ天守造立ナシ、寛永年間梨子畑トアリ、其

四 近世後期の町方の暮らし

後和泉岸和田ノ鎮守稻荷社ヲ当地ニ移シ、今ノ地ニ御建立、城郭鎮守トナサレシ由、

三三 初午に付、参詣人込合、御仏詣は御名代

(天保九年二月三日)

一 明日 御仏詣可被遊処、初午ニ付 御城稻荷江参詣之者共 内町込合候付、同席共之内ニ而 御名代相勤候様、御側御用人を以被 仰出、

三四 於御城稻荷社蚕祈禱 (文政十二年二月十日)

一 御城稻荷江蚕御祈禱ニ付、 御郡奉行 太田忠兵衛

右今朝 御代参相勤候段申達、

三五 御城稻荷初午祭礼、追手御門外に御旅所設置

(元治二年正月二十四日)

一 左之通御用人、御目付江申談、

一 当年之処も初午之節、稻荷追手御門外御旅所ニ相

成候付左之通、

(三ツ)

一 □月三日々六日迄追手御番所江守城手組大銃懸り戦士之内より五人つゝ昼夜不明様相詰可申事

一 右非番之内より四人つゝ東西御門并内町其外、町方度々見廻り可申事

一 追手・東・西御門江守城手組之御足輕ニ而相詰、御番所詰并張等可致事

但、東・西御門江者張斗リニ而式人つゝ之事

一 追手御番所江御番士之後口通り江御屏風相建、鉄砲拾挺御飾り之事

一 四日五日者御用之外者町在之者とも、御門内江堅く入申間敷候事

守城手組、御小姓組大銃懸り戦士并守城手配、  
三御門御番士ニ而、

一 御城下入口五ヶ所江見張番被 仰付候事

右之通向々江可被申談候旨、

三六 町方神社の六月祭礼日 (文政二年)

一 嘉利帝祭礼ニ付、御初尾銀沓包(德以下同)

御用人  
仙石左兵衛

右今朝 御代参相勤候旨申達、

一 御郡目付達、

祇園祭礼中、下目付為見廻候処、相替儀無之由、

(以上六月十五日)

一 本高寺弁才天

祭礼ニ付、御初尾銀沓包、

御用人  
原五郎右衛門

右今朝 御代参相勤候旨申達、

(以上六月十七日)

三七 秋葉権現神事に御代参 (文政五年)

一 寺社奉行達、

吉祥寺

来ル廿八日例年之通、秋葉権現神事執行致し候由、

(以上七月二十六日)

一 秋葉祭礼ニ付、御初尾(德) 銀沓包 御書翰役  
岩少兵衛

右今朝 御代参相勤候旨申達、

(以上七月二十八日)

三八 清正公祭礼に読経・説法 (文政七年六月十九日)

一 寺社奉行達、

経王寺

右当廿三日夕例年之通 清正公祭礼ニ付、廿日夕

廿四日迄読経仕并五日之内毎日五時過推鐘仕、廿

二日夕廿四日迄説法仕候旨申達候由、

右之趣 西御殿達 御聴、

三九 諸社社参に御供え (文化十二年六月十九日)

一 明後廿一日 御社参ニ付、御先例左之通申談候様御

用人江申談、尤御目錄認候義(儀)も御用人夕申談候様申

談、

稻荷

雄劍 一振

諸杉

龍蹄 一疋

神明

御馬代式百疋

八幡

御初尾(穗) 百疋ツ、

磯部

観音

同 銀耆兩ツ、

聖天

嘉利帝

同 銀耆兩ツ、

秋葉

弁天

11 娯楽・年中行事

三九〇 氏神祭礼に制禁の歌舞伎等催し罰

(文政元年八月二十三日)

一 御郡奉行達、

左之通、於評席申付候由、

下郷細見村

十助

甚四郎

其村方氏神祭礼之節之儀ニ付、先比も申触、猶又小役差出是迄仕来り之踊等者格別、歌舞伎・狂言類之儀者堅可為無用旨申渡、尚又其方共江ハ小役方申談置承知も乍致不相用段、重々不屈至極候、相糺申付方も有之候得共勘弁を以不及其沙汰、手鎖申付候、急度可相慎事

右同断、度々申渡候処不用、窃ニ相催候様申談不都束ニ付、追込申付候事

細見村庄屋

十左衛門

組頭 六兵衛

三九一 町方角力興行、上御覽方願出

(文化十二年十月十二日)

一 此度参り居候相撲 上御覽被成下候様、町方内々相願候旨、町奉行方非番月同席内江申達候付、評儀(職)之上相伺候処、御多門方御透見可被遊旨、御役人共

見物被 仰付候趣ニ而申談候様、被 仰出、其旨町奉行江申談、

一 今日惣出仕之儀ニ付、角力見物勝手ニ罷出候様申談、尤子弟共も見物不苦旨可申談旨、御目付江申談、

右之外、赤飯むすひ、御酒等角力取江被下、

三五三 歌舞伎芝居興行 (文化十二年正月二十四日)

一 町奉行達、

金剛院

三五二 殿様角力興行へ御祝儀 (文化十二年十月十三日)

一 東御門外ニおゐて角力興行、御役人方江見物被 仰付候付 殿様(政美) 大殿様御多門(久道)方御透見被遊、九ツ半(頭)比角力相始、暮時無滞相濟、

一 左之通御取斗有之、(社)

右先年庚申堂再建仕候処、未造作等不仕、難及自力難渡仕候、依之当春三月、四月の内 奥山川尻河原ニ於て、日和十日之歌舞伎芝居 御赦免被成下候様相願候由、故障も無之候ハ、詮義之上願通(體)申付候様申談、

三五四 花角力興行 (文化十二年九月二十九日)

一 一寺社奉行達、

福成寺

一 銀五枚、 勸進元江、

一 一同七枚、 東西角力取并行事共江、

一 一鳥目(貫)壹、五百文、 東西大関江別段被下、

一 一鳥目五百文、 昼辻弓役江、

一 一百疋、 行事并呼出し江、

一 銀札八拾三疋、 ちらし花、

右先年上京仕居候新町勇取長藏、此度罷下り候而花角力仕度由ニ付、拙寺境内ニ於て角力為致具候様相願候付、場所用違申候旨申來候由、

三五 於如来寺花角力、勇取長蔵 (文化十三年)

一 町奉行達、

願主 勇取長蔵

右旧冬々寒稽古致し居り候処、何方ニ而も有之義(總以下同)

付、取上ケ祝義棚として花角力於如来寺 晴天三日

仕度由、稽古中諸雜用者程々相濟候へ共、他出之も

の共江頭取元方々路用人別相応ニ手当仕度処、難及

自力ニ付、右花角力相願候由、

(以上二月六日)

一 町奉行達、

勇取

長蔵

右此間相願候角力興行ニ付、三ヶ所江建札之義并

御城下触太鼓之義相願候由、願之通申付候様申談、

(以上二月二十二日)

三六 於下河原芝居興行 (文化十三年)

一 御郡目付達、

福成寺永代経并、下河原芝居今日々相始候由、右ニ

付下目付差出、相替候義も無之候へ、相濟候上、可

申達由、

(以上四月三日)

一 御郡目付達、

福成寺永代経昨日切ニ而相濟候処、相替義無之旨下

目付申達候由、

(以上四月九日)

三七 石橋架替に子供からくり・舞・狂言

(文化十三年四月二十一日)

一 御郡奉行達、

出石町分

右字水越与申所堰溝土橋年々破損仕、百姓作場道難

渋ニ付、此度石橋ニ仕度処難及自力ニ付、子ともか

らくり、舞、狂言晴天五日為仕度旨相願候由、故障

も無之候ハ、勝手申付候やう申談、

申談、

三六 於奥山川尻自芝居興行願 (文化十四年三月十七日)

四〇〇 家中の花角力見物不苦 (文化十四年十月十四日)

一 御郡奉行達、

一 御郡奉行達、

座元福太夫

不動院

右兼而蒙 御赦免自芝居、奥山川尻ニ而当八日比よ

右相願候五日之内、角力三日興行仕候処、此間中雨

り日和十日興行仕度旨相願候由、勝手申付候様申談、

天統故、角力取も氣之毒ニ存、晴天五日相勤、翌日

但、三ヶ所立札、触太<sup>(或)</sup>鞍之儀、同様申談、

天氣能候得ハ、角力一日伊福辺社江奉納仕度旨頭取

三九 屋根修復に花角力興行願 (文化十四年九月二十五日)

カ申出候間、何卒右之通御聞濟被成下候様相願候由、

一 御郡奉行達、

一 右ニ付御家中之面々、見物之儀不苦候哉、相尋候向

中村 不動院

も候ハ、不苦旨、相答候様御目付江申談置、

右伊福辺社屋根及破損候付修覆仕度<sup>(復)以下同</sup>処、近年時節

四〇一 稻荷社屋根修復に角力興行 (文政元年八月朔日)

悪敷氏子一統難渋ニ付得修覆不仕、依之当月来月

一 寺社奉行達、

之内、日和五日境内ニ而花角力御赦免被成下、御

一 寺社奉行達、

家中様ニ茂御出被成下候様奉願旨、氏子庄屋共連

黒田周防

印を以相願候由、故障も無之候者勝手ニ申付候様

右稻荷社屋根破損ニ付、修理仕度処、難及自力、



依之八月、九月之内於下河原、日和七日角力興行  
仕、右余情を以修覆<sup>(復)</sup>仕度相願候由、故障も無之候  
者願通勝手ニ申付候様申談、

四〇三 橋修理に曲馬興行願 (文政元年八月二十日)

一 寺社奉行達、

福成寺

右参詣人并農作人通行橋及大破候処、修覆<sup>(復)</sup>難及自  
力候付、此度曲馬居合候間、境内之河原ニおゐて、  
日和五日興行仕度旨相願候由、故障も無之候ハ、  
願通申渡候様申談、

四〇四 家中見物の曲馬興行を申達 (文政元年九月二十三日)

一 町奉行達、

福成寺

右此間中興行仕候曲馬昨日切ニ而相仕廻<sup>(舞)</sup>候付、今  
日休日、明日明後日天気次第、御家中見物之曲馬

仕候段申達候由、

但、御家中見物之曲馬、寺中前通ニ而仕候旨相願置候  
処、場狭ニ付本堂前ニ而仕候由、

四〇五 芝居興行相仕舞 (文政二年四月晦日)

一 町奉行達、

一心光院兼而相願興行仕候芝居、当廿七日切ニ相仕  
廻<sup>(舞)</sup>候之由、

四〇六 鳥居修復に角力興行赦免願 (文政二年九月十五日)

一 町奉行達、

多茂宮別当  
持宝院

右多茂宮大明神鳥居大破仕候得共、自力ニ難叶候  
ニ付、広原川於川尻九月、十月之内晴天七日、角  
力御赦免被成下候様相願候由、故障も無之候ハ、  
勝手ニ申付候様申談、

四〇六 きりん興行晴天五日の願 (文政四年五月二十五日)

一 御郡奉行達、

番頭  
谷右衛門

右去ル十月きりん興行之儀相願、赦免申付置候処、  
病氣ニ付願下ケ相願候処、此節きりん罷越候付、  
晴天五日興行相願候由、故障も無之候ハ、三日興  
行赦免申付候様申談、

四〇七 曲力持興行 (文政十一年)

一 左之通御目付江申談、

此度如来寺依願、天氣次第明廿四日曲力持興行致  
し候、御家中望之面々見物不苦候、以上

(以上六月二十三日)

一 町奉行  
御目付達、

力持興行雨天ニ付、延引候段申達候由、

一 町奉行達、

(以上六月二十四日)

力持、御家中見物無滞相濟、何れ茂相変儀無之旨  
申達、

(以上六月二十五日)

四〇八 力持の曲興行願出 (嘉永二年四月十五日)

一 町奉行達、

河原町  
鍋屋治六

右江戸両国大浜芳三郎と申者、若者召連力持之曲  
仕、此辺江罷越申候付、於御当地興行仕度以  
御慈悲晴天五日 御免被成下候様、庄屋奥印を以  
相願候由、故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

四〇九 手づま巡業願 (嘉永元年四月二十一日)

一 町奉行達、

此もの共今明日手つま致し、御城下相廻ラセ申度旨相願候由、故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

越後国神原郡  
月形村

重兵衛  
竹藏  
吉三郎  
与三郎  
卯平

四〇 自芝居日和十日興行願 (文政三年五月四日)

一 御郡奉行達、

(元) 万歳座本

福太夫

右御免蒙り候自芝居、当月中旬ぶ、奥山川尻畑中、是迄之芝居跡ニ於て、日和十日興行仕度旨相願候由、故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

四二 浄瑠璃さらえ会願 (弘化二年十一月十日)

一 町奉行達、

左之趣相願候由、故障無之候ハ、三日之内許容申付候様申談、

寺坂村伊八ハ粹泰吉ト申者至而若年  
カ三味線好申ニ付教ヘ遣候処、其  
後大坂ヘ罷越、当節諸国名高鶴沢  
清七ト申名人ニ相成、此者親伊八  
当年十七回忌ニ付相当り、清七弟子共五、六人召レ參候  
付、幸之折柄故師弟之恩服し度、四、五日御当地にてさ  
らえ浄るり御救免之義、兵藏カ相願吳候様相願候付、  
乍恐御救免之義相願、席之義ハ馬屋善右衛門方ニ仕度  
旨、

天王寺屋

兵藏

四三 浄瑠璃さらえ会願 (弘化三年四月二十五日)

一 町奉行達、

此度城崎江大坂住居竹本文字太夫  
入湯仕居候処、先年御当所裏町ヘ  
住居罷在、其比町方若者共ヘ浄瑠  
理指南仕候付、幸之折柄、上湯之  
節御当所江立寄、さらヘ浄瑠理仕度段、文字太夫カ相願  
吳候様、右世話人江頼越候間、御免被 仰付被成下ハ、  
西方寺ニおゐて七日之内稽古さらヘ仕度相願候由、故障  
も無之候ハ、願通申付候様申談、

世話人

八木町

若荷屋勇治

同 魚屋町

丹波屋平藏

四三 浄瑠璃さらえ会願 (弘化三年十月十二日)

一 町奉行達、

此度大坂文字太夫入湯上り之席  
ニさらへ浄るり兩日相願候由、  
故障も無之候ハ、勝手ニ申付候  
様申談、

大鍛冶細間  
からつ屋  
三之助後家  
組合惣代

四四 城中行事

○御台所ニ万歳伺候(文化十三年正月七日)

一 御用人達、

例年之通御台所江万歳上候之由、

○初辰ノ水打(文政四年正月四日)

一 御普請奉行達、

今日辰之日ニ付 御城并御殿向其外共、屋根水打

候段申達、

○<sup>(亥ノ子)</sup>玄猪ニ付惣出仕(文化十二年十月十二日)

一 玄猪御祝ニ付、五半時麻上下着用惣出仕、御書翰役

を以、伺御機嫌申上ル、

一 玄猪御祝餅御居被遊、三次、<sup>(仙石)</sup>頼母、<sup>(荒木)</sup>御年寄共、御相

伴ニ而、御祝頂戴仕候事

(以下略)

○媒納無滞相済(文化十二年十二月十三日)

一 御普請奉行達、

例年之通 御城内 御殿向御媒納無御滞相済候由、

<sup>(用番)</sup>宅江申達、

○門松三拾五門(文化十三年十二月十三日)

一 御普請奉行達、

去年之通御門松三拾五門相納候由、

四五 八朔の綱引に不都束の儀、追込

(文政十一年八月五日)

一 町奉行達、

左之通一昨日於評席申渡候由、

当朔日其町内綱引之節、小役之  
者ヲ申談筋有之処、如何敷取斗  
有之候段、常々心得筋不宜故之義、<sup>(儀)</sup>行事をも相勤候身  
分、尚更以不都束之至候、吟味之上申付方も有之候得

田結庄町  
天王寺屋

五兵衛

一 共、格別之勘弁を以不及其沙汰、追込申付候、

右同断、

本町

太作

四六 八朔ノ綱引不行届に、町同心処罰

(天保三年八月七日)

一 町奉行達、

当朔日綱引之節御(締以下同)べり筋不行届

儀有之候付、叱り上追込、

同十二日赦免、

一 御物頭小倉武兵衛達、

叱り、其上追込、

右当朔日綱引之節御べり筋不行届儀有之候付、  
之通申付候由、

一 御物頭増田藤助達、

右同断、

町同心

料右衛門

源七  
又平

町同心加人

勇助

下目付加人

佐助  
惣作

右同断、

一 御物頭佐久間正之丞達、

右同断、

右同断、

一 御物頭渡辺喜左衛門達、

右同断、

右同断、

右追込之者共十一日赦免申付候段、頭々方申達、

四七 猪・鹿追願 (文化十二年正月八日)

一 御郡奉行達、

町分

右御城山、猪・鹿多数籠り作物荒し難儀ニ付、明

九日鹿追仕度旨相願候由、故障も無之候ハ、願之

通申付候様申談、

下目付加人

善藏

下目付加人

今平

町同心  
良左衛門

四八 御堀へ種籾漬日程 (文化十三年四月九日)

一 町奉行達、

内御堀 四月九日 外御堀 四月(十二日)十三日

右例年之通、種籾漬申度旨相願候由、則任勝手候之様、可申付旨申談、

四九 除地之内へ稲木仕度願 (文化十三年五月十一日)

一 町奉行達、

博勞町  
新町 作人共  
川原町  
小人町

右川筋除地之内ニ稲木仕候儀御停止之処、外ニ場所も無御座候付、右場所江当分稲木仕置申度、尤作物取入次第、早速取仕廻(舞)可申旨願書差出候之由、故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

四〇 虫送りに鉦・太鼓相用申度願出 (文化十二年七月四日)

一 御郡奉行達、

出石町分  
寺町分  
水上村

右村々稲作虫氣有之ニ付、明五日虫送り相願候由、尤鉦・太鼓(鼓)相用申度旨、故障も無之候ハ、願通申付候様申談、

四一 於万灯山、古寺鳴物用い雨乞仕度 (文政六年七月十七日)

一 御郡奉行達、

惣町

右旱魃ニ付、明十八日万灯山并於古寺、鳴物相用ひ雨乞仕度旨相願候由、故障茂無之候ハ、勝手ニ申付候様申談、達 御聽、

四三 笹踊に取紛れ出火に馳付不申御詫

『諸色記録書』川見す、志家文書

12 災 害

乍恐御詫奉申上口上之覚

一 先達而 御城下出火之砌、村方ニ笹踊仕罷在候ニ取紛、馳付不申候段、蒙 御差当ヲ奉恐入候御義ニ御座候、

(以下略)

四三 於一宮、二夜三日之内雨晴御祈禱

(天保八年九月十五日)

一 左之通御郡奉行江申談、達 御聴、

一 宮社ニ於て二夜三日之内、雨晴御祈禱、

御祈禱料

銀老兩

但、御代參無之、

四四 洪水記録

○洪水に川へ踏外し水死(文化十三年)

一 御目付達、

大橋下増水夕七時過八尺余ニ相成、夜六時比夕追々引水ニ相成、四時過六尺内ニ相成、大橋詰御役人共引取候由、

(以上閏八月四日)

一 町奉行達、

宵田町

惣右衛門

右昨日氣多中ノ郷辺江壳ニ罷越候処出水ニ付、市谷越へ罷帰り候処、平田と申辺ニ而川江踏外し、流死致し候処、死骸細見口ニ有之由、

(以上閏八月五日)

○洪水被害公儀へ報告(文化十三年九月九日)

一左之通御届相濟候由、

私在所但馬国出石、当月三日夜夕雨強、同四日洪

水ニ而常水ニ九尺余相増、侍屋敷所々水入破損多、

山崩土手切道切、在町水入流家崩家等御座候、城

内別条無御座候、田畑一円水押ニ相成委細之儀者

未相知不申候得共、先此段御届申上候、以上、

閏八月廿八日

御名

○洪水被害詳細公儀へ御届(文化十四年正月十五日)

一左之通御用番青山下野守様江御留守居持参差出候由、

但、式度目御届是ニ而相濟、

口上覚

私在所但馬国出石郡・養父郡・氦多郡・美含郡并

丹後国竹野郡・熊野郡領分、閏八月三日夜より風

雨強、同四日洪水ニ付田畑川欠、石砂入、水入、

風痛多、其上当秋雨天勝ニ而腐稻、不熟稻等多、

収納之上損毛高并破損之覚

一高式万七千五百七拾石八斗式升式合

損毛

一山抜

千九百四ヶ所

一橋流

百三拾五ヶ所

一水門寛流

七拾參ヶ所

一堰流

四百六拾三ヶ所

一流家、潰家

四拾七軒

一刈稲流

百三拾七束

一稲木材木流

式百五拾壹本

一流船

壹艘

一流死人

壹人

右之通御座候、城下川水常水ニ九尺余相増申候、

城内無別条牛馬怪我無御座旨申越候、此段御届申

上候、以上

予十二月廿六日

御名

○大橋下増水六尺(文政三年)

一御郡奉行達、

昨夜夕追々出水大橋下打懸六尺ニ相成、橋杭江か



よりもの等有之旨、下目付申達候由、

(以上三月十九日)

一 御目付達、

今日之大雨ニ付大橋下増水、夜四ツ半時比ニ至り

打懸ケ六尺ニ相成候由、

(以上五月二十七日)

○大橋下増水七尺(文政四年八月五日)

一 御目付達、

昨夜中風雨ニ而大橋下増水五尺五寸ニ相達候段、

今曉申達、其後追々六尺六寸、七尺迄申達、

一 右出水ニ付、御役人共前々之通大橋江相詰候由、

一 大橋下増水六尺内ニ相成、御役人共引取候段五時

御目付申達、御役人宅江茂罷越申達、

○出水にて新橋橋杭損傷(文政五年七月二十六日)

一 御目付達、

一 今曉大橋下増水五尺五寸ニ相成り候由、

一出水ニ而新橋橋杭老ケ所損し候付、兩三日往來留

仕候旨、御普請奉行方申達候由、

○大橋下増水七尺三寸(文政八年八月十四日)

一 昨夜方大雨之処追々出水、夕七時前大橋下五尺ニ相

成り猶又五尺五寸、七時過ニ至り六尺ニ相成、無程

六尺五寸ニ相成、御役人共大橋ニ相詰候段申達、暮

六時過ニ至り七尺三寸迄相成り、其後引水ニ相成候

趣御目付方時々申達、尤夜四時過出役之御役人共引

取、御用番宅江罷出委細申達、

一 七時半比方雨足も弱く相成、其後小雨ニ相成り

折々時雨候事

○洪水にて城下家屋に浸水(嘉永三年九月三日)

一 大川増水六尺ニ相成、大橋江御役人共相詰候段、御

目付申達、

一 今日之風雨、谷山川筋殊之外出水、右故哉水勢烈(谷

山カ)川筋・往來一面之水与相成、欄干橋上服部鳥之助

門前カ、下岩鼻往來、宗鏡寺町丁字屋辺迄一面川原

ニ相成り、却而元川筋ハ石砂に而埋り実ニ前代未聞

之事、岩鼻淺井六郎右衛門門内庭之分流レ、心光院橋流レ宗鏡寺町石橋中程落、就中欄干橋辺之水材木町へ溢レ、東御門の方へ突当殊ニ御城山之水烈しく上ハ堀一面之出水、右故哉東御門前切レ其水内町へ流レ込、并大手御堀の水強く左右之駒寄セ倒れ、田結庄町上へ流レ込、同町家不残床へ上り、八木町上田吉郎右衛門宅辺迄も床へ上<sup>リカ</sup>、本町下なども床へ上り、鉄砲町辺なども強く折原<sup>リカ</sup>石砂入、金沢宅など水床へ上り、昌念寺御廟の辺余程欠ケ、其辺大木三本根こぎニ相成、如来寺善光寺前松根こぎニ倒レ、其外數ヶ所大破候、

四三 火災記録

○火事にて焼死（文政八年十二月六日）

御郡奉行

一町奉行

御郡目付

下村分茶白山  
川原町丹波屋<sup>厄介</sup>

右小屋今曉六半時出火、近所之者共早速駆付候へとも燃上り直ニ焼落、右厄<sup>厄介</sup>致焼死候由、小役見分差遣候処相違無之、其外相替義<sup>儀</sup>無之由、

○一カ月に三回も火事沙汰（天保九年八月）

一曉七ツ時過火事沙汰致し候処、早鐘打候付早速出仕、火元出町柴田周左衛門木部屋<sup>カ</sup>出火、居宅焼失、其余類焼も無之、七ツ半時過鎮火之旨、火消御物頭始何れも追々出仕申達候付、一統退出、  
（以上四日）

一夜五ツ時前早鐘打候付、何れも早速致出仕候処、出町関庵介宅焼失之由、追々及鎮火外類焼等も無之、其外都而相替儀無之旨、火消御物頭始御役人共出仕申達、何れも退出、  
（以上十四日）

一夜八半時過新町出火、早鐘打候付、早速一統致出仕候処、少々風も有之、追々相募候付、玄蕃、弼兵衛

火元江罷越致裁許、御用番ハ居残り罷在、

一新町中程ヲ少し下モ小頭銀兵衛、町人良助居宅□合

ガ出火、左右并兩側江焼広がり都合廿軒焼失、曉七  
ツ半時過及鎮火、玄蕃、弥兵衛場所引取直ニ猶又  
出仕、火事之模様申達、

(以上二十八日)

○小御料庄焼け(慶應二年二月四日)

一 今昼八つ時過火事沙汰有之、早鐘打候付、早速皆々

出仕致し候処、小御料庄町より焼出し西北之風強く、

博勞町河原之方江飛火、夫々小人町江飛火致し、追

々大火ニ相成候付、御用番居残り、荒木頼母、乗竹

彌、仙石晃之允火元江罷越裁許致候、

一 追々大火ニ相成候付、御出馬被遊、

一 追々飛火等ニ而三ヶ所之火口ニも相成、何分怪敷火

ニも無之哉、殊ニ今日ハ稻荷祭礼ニ而他所之ものも

入込、殊之外群集致し居候付、不取敢 御城下見廻

り之儀御物頭江左之通申談、

組之者召連 御城下見廻り、若し

怪敷もの見受候ハ、召捕候様、

但、騎馬ニ而見廻り候事

御物頭

倉品斐夫

一 今日者天氣宜しく屋根等ハ能く乾き居候上、風も強

く小御料庄町不残焼、博勞町神子之細間ニ飛火河原

之分不残焼、夫々小人町河原之方ニ飛火、又小人町

奥ニ飛火其辺不残焼、重田甚五兵衛宅一軒先ニ而焼

留る、

一夕七つ半時鎮火ニ及候付、火元ガ尚又出仕、

一同刻過 御帰り被遊、

一 火消御物頭、御郡奉行其外御役人共追々出仕、鎮火

之趣并怪我人等無之段申達、尤火元ハ小御料庄町御

足輕数平と申もの宅之由、数平義ハ今日初午ニ付御

門江見張ニ罷出、留守之もの小豆を町方ニ買ニ出候

跡ニ而、竈之火燃すかり柴ニ燃付、夫より其側ニ有

之候たわらニ付、夫より右通り之大火ニ相成候由申

達、

害

12 災

○小御料庄町火災ニ付、殿様出馬

『改撰仙石家譜副本十 政美公、植野弘司氏所蔵  
久利公』

慶応二年丙寅二月四日初  
午 昼八時過、出石小御料所町住  
足輕数平宅より出火、西北の風強く博勞町、小人町へ  
飛火、家数六十八軒焼失す、依て出馬す、二月二十日  
此旨を老中に届出、

○出火見舞帳（慶応二年二月四日）

大森章市家文書

（表紙）

慶 応 二 年  
出 火 見 舞 帳  
寅 二 月 四 日 夕

（裏）

大 森 梶 兵 衛

一 かいしやくし

式本

升形

鍋喜○

付木

一 なわ

桜尾

良平○

一 徳利 壺本

播磨屋

治平○

一 夜喰

山本

大助○

一 夜喰

日の辺村

与平

にしめ

醬油 壺升

一 酒 升

壺

柳町

治右衛門○

四 近世後期の町方の暮らし

- 一 夜喰 とうこ
- 一 しやく 壹本
- 一 菓子
- 一 米貳升
- 一 包 貳匁
- 一 わら
- 一 わら
- 一 なわ 壹束
- 一 しやくし 貳本
- 一 徳利 壹本
- 一 ほた餅 一重
- 一 夜喰
- 一 茶碗 十

- 加藤様○
- 米屋 平兵衛○
- 木町 今村
- 西宗寺様○
- 伊豆村 惣左衛門
- 桜尾 松平○
- 宮内村 弥市
- 細見村 仕平
- 船屋 半左衛門○
- 家城貞七
- 桜尾 庄平○
- 細見村 弥助
- こめ屋 武助○

一 むしろ 壹枚 宮内村 徳平

一 米 三升 新町 治右衛門○

一 包 五匁

一 ほうぎ 塩屋 十兵衛○

一 志やくし 三本 同者大根

○裏町大火(文政六年四月四日)

一夜八時比火事沙汰有之、早鐘撞候付、早速出仕致し候処、鉄砲町橋より四、五軒西之方裏町家々出火、折柄南風強節時に相募候付、左京方はしめ玄蕃、清兵衛火元江罷越裁許いたし、御用番并主計居残り罷在、

一南風烈敷直様鉄砲町乗竹弼、金沢半蔵、杉原官兵衛屋敷類焼、裏町へ左右江火移り、鉄砲町屋敷、御長屋不残、如来寺焼失、既ニ昌念寺も危処、段々敷敷相防候故別条無之、裏町不残、田結庄町下西側ハ真覚寺下隣々、東側者裏町上角々下不残、川原町堅・

横不残焼失、六時過鎮火ニ相成、左京かた、玄蕃、  
清兵衛 御殿江引取、

四三 地震にて土蔵等破損 (文政二年六月十二日)

一 町奉行達、

今日地震之處、町方家居等格別之破損等も無之、  
尤土蔵等者所々破損も有之候、